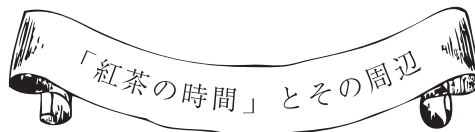


きもちは、 言葉を さがしている



第49話

水野 スウ

40年目の紅茶の時間

毎週水曜の午後、家を開いて「紅茶の時間」をするようになって、今年で40年目になりました。25年前ほど前からはやっていないのは相変わらずだけど、コロナの時期はさらにそれが加速し。それでも不思議と誰かしらやってきて、近頃は、来た人と私たち夫婦だけの貸切状態になることも多い、静かな紅茶の時間がそこに流れています。

紅茶は、理由も目的もなんもなしに誰が来てもいい場所だけど、はじめてここに来る人には、たいてい何かしら理由があります。私の本を読んでか、話を聞いてか、またはどこかで名前を見かけてか、「一度来てみたかったんです」とはるばる県外からやってきた人の話を聴きながら、その理由がわかってくる場合もあれば、本人も気がついてなかったけれど、話しているうちにその人自身が気づいていくこともあります。

私はその場にずっと居て話を聴いているので、自分なりの来た理由を発見したとたんに、ひとの表情

がかわる、その瞬間に毎回立ち会えています。それは、とても楽しくて幸せな瞬間の共有です。

何もしないことをする

2月のある日、マミさんという方から、金沢の友だちに聞いたんですけど紅茶に行ってもいいですかとメッセージをもらいました。

マミさんは神奈川県に住んでいて、本を出版したり、対話を広げる活動をしたり、まちづくりをしたり、家を半びらきにしたり（住みびらき、という言葉があるけど、そこまでフルオープンじゃないって意味かな？）しているそう。たまたま金沢に来る用事があり、何かのタイミングでお会いできたら、と連絡をくれた、というわけ。

はい、もちろんどうぞどうぞ、とメッセージの返事を書きながら、紅茶は長い年月続けてるとはいえ、週に一回開けているだけで、ましてや今は全然はやってない、はた目には何をしてるかよくわからない場所。もしか遠くからの人が、紅茶を過大評価したり、過剰期待したりして来るとなると、それはとっ

でも困る！ そう思ったものだからマミさんに、紅茶の時間って何もしないということをしている場所なんです、と事前に伝えました。そしたら「何もしないことをしてる！ 最高です。私も、ただ場があるだけ、という何もしないイベント開きました」とお返事が。

え、どういうことだろう。彼女がメッセージに貼ってくれたリンク先を読んでみて、その意味がわかりました。

彼女の計画していたイベントがある事情でキャンセルとなり、だけど場所はもう予約済みで、お金も払ってある。ならば、主催者からは何も提供しないけど、誰が来て何をしてもいい、という“ただ「場がある」だけ”のイベントをしよう、と思いついたんだそうです。

その日、マミさんが来る人にリクエストしたのはたった一つだけ。カレーの材料になりそうなものを持ち寄ってください、と。

ふたを開けてみれば、当日は5歳から80歳近くの人が50人集まって場を囲み、みんなして大量のカレーをつくり、それをみんなで食べ、あとはそれぞれが自由に、そこにあるものでそこにある時間をシェアしたのだといいます。

何もしない、という言葉に紅茶の時間とのシンクロを感じました。それと同時に、マミさんがこのイベントをしようと思った理由の一つ——イベントの「消費者」になることの空虚感、主催者になって「消費される」ことの徒労感、と書いていた感覚にも、私自身、思い当たることがありました。

雪の日の紅茶

マミさんがやってきたのは、はじめてメッセージをもらってから7日後、結構な雪の日の紅茶でした。以前に何度か紅茶に来たことがあるという金沢の友人が、彼女を車に乗せて来てくれたんです。

なんてアクティブな人！という第一印象のマミさんに、前から気になっていた「消費者」とか「消費される」という言葉に話をむけてみると、彼女はこんなふうに答えました。

世の中にはさまざまなイベントがあるけど、自分が参加するときは、参加費を払ってそれに見あうものを持ち帰ろうとどこかで思っちゃう気がする。まるで消費者になるっていうか。逆に、自分が主催者になったときは、お金もらってるんだから期待されるものを提供しなきゃ、と思いがち。でも、それって自分が消費されるみたいな感覚。そのことにモヤモヤしている、と。

ああ、それ、わかるなあ。それを一番感じたのはいつだったか、そうそう、金沢から引越してきた、あの頃だったことを思い出しました。

紅茶って何するところ？

紅茶の時間のはじまりは、生後11ヶ月の娘を抱えた私の、子育て仲間見つけのためでした。

今から40年前は、子育て支援センターという言葉も場所もまだない時代。はじめての子育て、どうしたらいいかわからなくてとまどうこともたくさん。かといって、娘を連れて行ける場所もそう思いつきませんでした。

子育て仲間が切実にほしい、仲間と出逢いたい。そっか、それなら我が家に来てもらおう！ そんな思いつきからはじめた紅茶の時間は、赤ちゃん連れで気楽に行ける場、仲間と出会える場を求めているほかのママたちにとっても、うれしくて大切な場所だったと思います。

なので当時は、紅茶って一体何するところ？と、考えることも訊かれることも、一度もなかった。おさなごと一緒にやってきた一人ひとりがそれぞれ、場と仲間を、当時の私のように真剣に求めていたのです。

だけど31年前にこの町に越してきて、知らない土地で紅茶の時間の続きをしようとした時は、状況が違いました。娘も10歳になっていて、赤ちゃん連れで来る人はもう少なくなっていたんです。まして、当時は金沢から車で40分の場所。子育てに忙しい金沢の人は、余計に来にくかったと思います。

まわりのご近所さんたちにしたら、金沢から越してきた人が、水曜日の午後、誰でもどうぞ、といっ

て家をひらくらしい。そこでいったい何をするの？自由に、好きに、そこに行って、無料で、お茶を飲む、おしゃべりをする？ なんのために？ きっとそんな「？」マークが、近所のお母さんたちにはいっぱいあったことだろうなと思います。今は住みびらきという言葉があるけど、当時は家をひらく、っていう概念がちっともポピュラーでなかったですもんね。

期待して待たれる、ということ

紅茶をしてきた中で、実はその頃の半年間が、一番もやもやしててしんどい時期だった。そのわけが、マミさんの「提供することを期待される」という言葉で、改めて見えてきた気がしました。

私がしんどかったのは、近所のお母さんたちから、私が何かすばらしいものを提供することを期待して待たれている、その空気だったんじゃないかな、と思ったのです。

金沢時代の紅茶は、これといってとくべつなことは何もしていなかったけれど、場を開く私も、そこに来るお母さんたちも、一緒にその場をつくっている実感がありました。

だけど、津幡に越した途端、提供する側とされる側に分かれて、何かすてきなこと、いいものを期待されて待たれている私がそこにいた。いやいや、これってなんか違う。紅茶はこういう場所じゃなかったはず。だけど、それをうまく伝えられないもどかしさ。

ああ、そうだったのか。そんなもろもろのきもちがああ頃の私にはあったんだねえ。マミさんの、何もしない、何も提供しない、という言葉が呼び水になって、31年前にタイムスリップした私の中で、ようやくきもちが言葉を見つけ、すっと腑に落ちていくものがありました。

マミさんが、何もしないことをする、というイベントを開いたあの日。主催者が用意したんでなく、はじめは何もないところに、徐々に人が増え、カレーの具が集まり、そこに参加した人たちと協働で1日限りの場と時間をつくっていったのだろうな。そのことが、「消費」や「期待」にモヤモヤしていたマミさんにとって、どんなにかうれしかったろう、

と改めて思ったのでした。

焚き火に薪をくべるように

紅茶に来る人には何かしら理由があるとはじめに書いたけど、実はマミさんが紅茶に来たのには明確な理由がありました。仲間と一緒につくった本を、金沢の滞在中に献本する場所を探してもいたのです。

その本のタイトルは『ことばの焚き火』。それは、マミさんがこの数年間に「対話」を仲立ちにして出逢った人たちと、対話という名のミーティングを重ねて共著で出版した、対話についての本でした。

本について私に説明してくれる中で、対話することを、焚き火に薪をくべるように自分の思っているまを言葉にだしていくこと、と表現したマミさん。

焚き火に薪をくべるように——この表現には親しみがありません。というのも、紅茶の部屋の真ん中には薪ストーブがあって、長い冬の間はいつもそこに薪がくべられ、火が赤々と燃えているのです。もちろん、マミさんがやって来たこの日も。

金沢のマンションから津幡の一軒家に越してきて、はじめて薪ストーブを使い始めたときは、なかなかうまく火がつけられなくて苦労したものです。だけど、何度もトライするうち、だんだんコツをつかんでいきました。

はじめはクシャクシャの新聞紙、そのうえに使用済みの割り箸、そのうえに樹の皮や木端こっぱをのせて火をつける。それが燃えたのを見届けて、次に細い薪を置く。ここで焦って大きい薪をのせると、重さに負けて火が消えてしまうので、慎重に。

炎の表情をじっと見ていると、ここらでもう1本足そう、というタイミングを炎が教えてくれる。そろそろ大丈夫そうと思ったら、次の太さの薪をくべる。燃え移って、燃え移って、だんだん大きな炎になっていく。勢いよく炎が出る状態がしばらく続いて、それを越えると、次第にやわらかく静かな炎に落ち着いていく。

私が一番好きなのは、炎がおさまって、炭のようになった木が赤く発光している、熾おきという状態。実は、燃え盛っているときよりも、熾のほうが火力が

強い。薪全体が集合体のようになっているところにそっと大きな薪をくべる。すると、そこからまた新しい炎が立ち現れる。

フィンランドで生まれたオープンダイアログは、もともとは森の暗闇の中で焚き火を囲んで輪をつくり、その火を見つめながら順番に自分のきもちを語っていくことがそのはじまりだった、と聞いています。紅茶でしていることもどこかそれと似ているかもしれない、と以前から思っていたので、『ことばの焚き火』という本をプレゼントされた時、その感覚と初対面ではない、むしろ懐かしいきもちがしたのです。

自分とつながる言葉で

「対話」に出会うまでのマミさんはいろんな仕事をしてきたのだそう。だけどいつも一つのところ、一つの職場に長くとどまらない、数年単位でそこをやめてしまう。自分はなぜ一カ所で長続きしないんだろう、飽きっぽい性格だからかな、と自分を責めたこともあったというけど、彼女の根っこには、自分はいったい何者なんだろう、自分は何のために生きているのか、自分が自分であるためにはどうすればいいんだろう、という根源的な問いが常にあって、彼女の中でそのことがずっとぐるぐるしていたようでした。

やがてマミさんは気づく。そうか、自分って人間は、ある枠のなかにはいりこんでしまったら行き詰まる。息が詰まって生き生きした自分でいられなくなるんだ。

その頃からか、マミさんは「対話」というものに関心をもつようになり、対話について研究したり、実践したりしている人たちと次々に出逢っていきます。そして長年ずっと抱えていた、自分が自分であるためにはどうしたら、という問いの答えに近づくようなキーワードを見つけました。ああ、私は“自分とつながっている言葉”でひとと話してこなかったんだ、と。

自分とつながっている言葉——そうマミさんが口

にした時、それ、とても大切な言葉だ、と、私はとっさにメモ帖にかきとめました。

安心のおざぶとん

マミさんの言葉を書きとめながら、私は津幡へ越して数年してからの紅茶を思い出していました。

金沢でのにぎやかな子育て井戸端時代から、津幡へ越してきて、何か素敵なのが提供されるのではと期待された時期も過ぎ。やがて紅茶が、毎週そんなに大勢がくるわけでない、はやらない場所になってきたころから、紅茶で語られることの中核は子育てに関することというより、それぞれの内なるきもちの方に移行していきました。

そのことに、はじめは私自身とまどっていたけど、カウンセラーでもなんの専門職でもない、ただの人である私がそこですること、できることといったら何だろう、と次第に考えるようになりました。

そうだなあ……その人の話を、平らな関係性の中で聴くことと、その人のきもちが言葉をさがしやすい安心のおざぶとんを用意すること、ぐらいかなあ。

そのためには私自身が、身の丈の言葉で思っていることを語ってないとな。その頃から、自分の口にす言葉の前より意識するようになりました。そう意識することが、私にとっては、自分とつながる言葉で話す、という練習のスタートだった気がします。

そうか、ここって思ったままを言っている場所なんだ。弱音はいてもいいし、後ろ向きのきもちを見せてもいい、否定されない、ああせいこうせい言われないとこなんだ。紅茶に来る誰かが、そんなふうに紅茶という場を信頼して安心できるようになると、一人ひとりの話す内容や言葉がだんだんかわっていくのを感じました。

どうやら、自分の感じていたことを言葉にできた！という体験は、話の大きい小さいや深さにかかわらず、少しずつだけでもその人の囲いにひびを入れていって穴をあけ、本人も気づいていなかったその人自身とあらたに出逢わせてくれるようです。

自分がかかわると、いつのまにかそのまわりの人もかわっていく、そういう体験を、私自身はもちろん、

紅茶の仲間たちも、くりかえし積み重ねてきて、今のような紅茶になっていったのだと思います。

紅茶の時間というところは、自分がいま思ったり感じたりしてることを言葉にしていく場、きもちにできるだけフィットする言葉を探し、探し、話していく中で自らを放していく場、ではないのかなあ。そのプロセスはマミさんが言った、自分とつながる言葉で話すことと、とても近いもののように思えました。

そうはいってもね、自分の思っていることを言葉にする、って言うは易く行^{かた}うは難し。マミさんも長いこと、それをしてこなかったように、それぞれの人の中に、建前とか立場とか組織とか世間とか空気とか常識とか思い込みとか育ってきた環境とか、きもちの言葉化をじゃまするハードルはそこら中いくつもある。だから自分とつながる言葉で話すってことは、誰にとっても何がしかの練習が必要なことなのかもしれません。

紅茶は別に言葉化トレーニング！(笑)なんてしているわけではないのだけど、紅茶に来て、きもちを話している人の横でたまたま一緒に話を聴いていた人が、その日は自分のことを話さなくても、その場の安心という空気を持ち帰り、次に来た時、自分のきもちを話しはじめる。その場にいた同士がお互いに影響しあって、安心を届けあう。

「ここにくるとほっとするの」「なんか安心できて、別に話すつもりじゃなかったことまで気づいたら話してた」という言葉を紅茶ではよく聞きます。人と人の中でそんな循環が自然に起きて、いつのまに貯まった安心貯金が、長年かけて今の紅茶の時間の空気をつくっているんじゃないかと思うのです。

たいわ紅茶

その雪の日の紅茶は、マミさんと、彼女を車に乗せてつれてきてくれた金沢の友人と、私たち夫婦の貸切、と思っていたら途中で、小松からひさびさに古くからの紅茶仲間が2人で顔を見せました。

はじめまして同士の人と人が、対話についての話を、へえ～とか、ほお～とか、いっぱいつぶやきな

がら言葉をかわしあう。窓の外の雪降る景色を眺めながら、薪ストーブの燃える火を見ながら、誰かの言葉に呼応して、感じた言葉を出していく。私は、マミさんの言葉をきっかけに、今の場所に越した当時はふりかえり、いっぱい思い出し、それをまた火に薪をくべるように言葉にしていき……。

それはまるで、紅茶のしてきたこと、していることに、「対話」という立ち位置からあらためて光をあててもらったような、とてもこちよい、たいわ紅茶の時間でした。

植^{しょくほん}本、という言葉

マミさんは「献本」する場所を探して紅茶にきた、と先に書いたけど、マミさん自身の言葉ではそれを「植^{しょくほん}本」と表現していました。へえ、おもしろい言葉。

マミさんの言葉を借りるなら、対話する、って、焚き火に薪をくべるように自分の感じてる言葉をだしていくこと。その焚き火は、木がないことにははじまらない。本は紙でできているけど、その紙はなんでできているかっていったら、木です、森です。対話の本を仲間と一緒に対話の森でつくって、その本を人と人がまじわる場所に置くことを、本を植える、と表現するのは、なるほど、理にかなっていることかもしれませんね。

お返しに私からの献本、マミさん流にいうなら植本は、たぶんこれが一番ふさわしそうだ、と2004年に出した紅茶の本『きもちは、言葉をさがしている』を彼女に手渡しました。この本もまた、紅茶の時間で生まれた対話からできている本なので。あ、この本のタイトルは同時に、対人援助学マガジンのこの連載タイトルでもありましたっけね。

2023/2/19

『ことばの焚き火 Dialogue in Daily Life』

著者：大澤真美・中村一浩・植田順・野底稔

発行：ハンカチーフ・ブックス

発行年：2022年